



近世名家書畫談二編

一



近世名家書畫談

二編全四冊

甲辰夏

雲烟子著并梓



素質
能自
秋香
待風吹
藝生



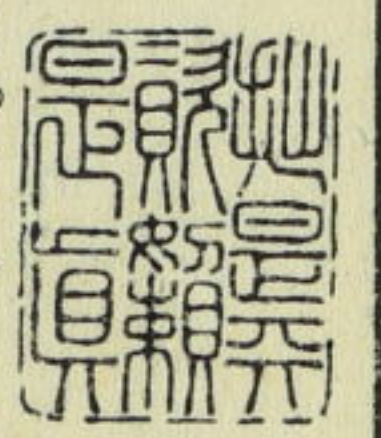
自序

全

近人之好古書畫。唯觀之。其是也。求
 耳。至其剝蝕者。無若洛款。去與心者
 不顯著。則雖尤物。棄之如土芥。嗚
 呼。此風一長。偽者日眾。真者日湮。而
 後世終將不能窺古人之精神。豈
 不亦哀乎。余乃不自揆。妄著此編。
 既報其弊。并於萬分之二。因呼椿山先
 生。字之蓮。以弁卷首。亦所以見拾珠
 玉於泥中。之意也。甲辰冬月
 烟安西於慈溪溪



書畫談續編序

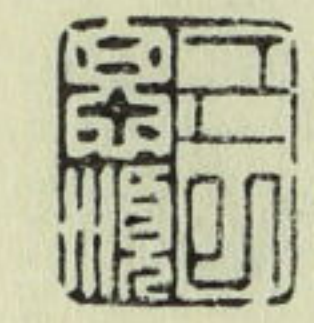


王逸少嘗謂。年在桑榆。彩絲竹
 以陶寫。此之濼矣。文極了。色之
 娛。唯顏能表暮。事之或可也。然
 猶為危險焉。况如強壯。假之為
 適。其不伐性自天。以玉滿。力。度。
 可弗悚。學來。勸業之士。鵝。好。學。

學。其為世。其復。心力。樂矣。思。一。口。自。
以。盈。源。產。煩。抑。者。惡。乎。寫。也。
必。求。曠。襟。爽。懷。惟。一。室。清。林。之。
焚。香。淪。茗。法。亦。不。畫。之。交。互。展。
觀。有。此。靜。好。耳。是。乃。尚。在。古。
人。之。載。之。且。嘗。遇。之。其。樂。果。
何。如。哉。安。西。雲。烟。生。少。嗜。去。畫。

既深於繪畫。述其所得。刊布之。
吾人爭觀之。後。今。出。餘。蘊。囑。余。
其。囊。因。翻。閱。如。次。皆。通。融。高。
刷。頃。余。執。起。文。尾。今。老。矣。如。得。
掃。一。室。觀。圖。云。優。游。終。餘。年。
是。為。教。亦。善。耶。免。於。大。老。之。
嘆。何。必。用。也。之。於。為。竹。節。也。

烟以冊視之。凡塵膠接。以瀾石
 利。法多而得之徒。豈非醒疾之
 禁。方仙丹也邪。是為教。於神
 嘉平月。程松老朽。謾月舟之人
 聿于茲後。孫之心。



書畫談續編序



作書畫難矣。然不若鑒書畫之最難也。
 何以言之。凡作書畫者。筆墨必良。縑素必
 佳。而又有粉本法帖可以依擬。研石楮披
 堅甲執利兵以臨乎陣。是以拙工劣伎。
 亦或有奏其功者矣。至鑒書畫則不然。
 蓋天下古書畫之夥。紛々紜々。不可勝窮。

而玉石混淆。真偽雜然。其所恃以鑒之。則唯一雙眼孔而已矣。此如夫有粉奉法帖。可依擬也。是猶挺單身奮空拳。以當百萬之敵。自非有得神機。豈能免于挫衄乎哉。吾友雲煙主人長手賞鑒。其於真偽。慧眼如炬。一睨無所逃。余嘗出家藏數幅。覆歛。遂印。使其鑒之。片言奇中。

石不認一。嗚呼。雲煙之得神機。誠可畏已。宜乎其以此伎馳藝苑。而每一人交鋒爭衡者也。往年雲煙泄其所得。撰名家書畫談二馬。其談奇拔。其論精確。能使讀者駭角稽首。而英悍之氣未艾。今又著續編四卷。其造詣之深。闡發之微。較之前輯。殆有加焉。謂之賞鑒之堅甲利

兵。不_二六可手。失甲兵之於神機。相去遠矣。然其堅利者。能使人勇武。則此編之出也。二安知_下無_下依據以馳騁藝苑。衝突文陣者。不興哉。余請張膽而俟之。

天保十五年甲辰抄秋油菴外史大橋

順撰



鼎齋生方寬書



近世名家書畫談二編卷之一目次

- 大意
- 鑑定論
- 半鑑の論
- 學者鑒定を誤る事
- 書画好小異同阿る事
- 藥山紫山書榮悴の事
- 妙語時小不遇事
- 圖樣雅俗好の事
- 和歌連俳作意好嫌の事

附茶論

- 墓碣碑帖の事
- 真蹟の劣墨刻小勝る事
- 書画臨寫可謹事 附裝潢字義

近世名家書畫談二編卷之一

雲煙子 安西於菟編次

大意

唐羊士諤の句小畫披靈物態書見古人心とは是書畫
 愛玩の真訣少て餘事と共ふ語るべし蓋し書畫ハ
 六藝の一ありて最上乘の好事なり故小古人も言聲
 詩養心術と云り自ら書画成作者能く體認せざんばあ
 るべし又惣て文辞小あづかるる此意成知らざれば野鄙小
 して温雅の趣成得む故小唐土の文士名家大家共小皆此技
 小工なり然も共見地無く此技のこ小耽らば却て薄俗とあるなり

素より君子しんしに近ちかき遊あそ戯びよて儉けん樸ぼくの爲ためのこゝにあままバ能よく其その道みち哉や知しる時ときハ此この好この事こと小すさ勝まさりしる清せい娛ご何なんや小せう人じんを閑居かんきよして不ふ善ぜん小すさ入いり富ふ足そくの身み哉やもて安あん逸いつ小すさ居きまま酒さけ小すさ耽たり色いろ小すさ溺おまま竟つ小すさハ性せい命めい哉や短たん縮しゆくままるる自し然ぜんの勢いきほあまて此この道みち小すさ多たよりなき故ゆゑあり此この清せい娛ご哉や以もつて小せう人じん富ふ有あの身みの淫いん樂らく哉や防ふせぎ君子しんしの正せい道どう小すさ誘いざなひま便べんりとなさんんこと可たなり必かならず自みづか餘ひの骨こつ董とう女にょ媠しゆの業わざと共とも小すさ語ごることなるる画え一いつ

鑑定論

前編ぜんぺん既すで小すさ堅けん定ていの事こと哉や論ろんして宋そう湯たう屋いつが觀くわん画が六りく法ぽう

乃なことを舉あぐ又また夏あ文ぶん彦げんが看けん畫がの法ぽうを録ろくままその條じょう小すさ燈とう下げ小すさ畫が哉や看けんる画が一いつと云いひ是こゝ唐たう土ど文ぶん人じん看けん画が乃な規き矩こ小すさ一いつと尤もつとかかくあるるべきことなり志しのこゝに共とも我わが邦くにを惣むすて辨べん給たまひます何なんくくと哉や常じょうととる風ふうありて是こゝ而已のみ小すさても鑑けん定ていの肯けん綮けい哉やあまま孰た所ところあり高かう陽やう山さんの言いふ學がく識しあまま目め利り定ていままるるべきと云いふままで又また學がく何なんくく故ゆゑ小すさ疑ぎ所ところありて害がいとなるることもあるなり唐たう土ど六りく南なん北ぺい共とも小すさ文ぶん人じん多おほくして畫が意いかかのづづら文ぶん意いあり我わが朝あさハ文ぶん人じんハ文ぶん畫が家か者しや流りゆうハ画が家か者しや流りゆう各かく別べつなるる也なり和わ漢かん雅が俗ぞく小すさ徹てつ底ていままるる小すさ何なんくくささバ觀くわんるる画が一いつ寸すん予よ前ぜん編ぺん

或述一時ハいま此業小入るべしと學者の説の或
 信ぢり今既小業小へりて累年頗る切磋の功或積
 多る小学者の説の或も小も據るべしと又多く看る
 小も阿るべし能手の贋と拙作の真とハ實小毫髪の
 多るひよと口舌小ハ説きざり真の真なるもの贋の贋
 なるものハ一目瞭然として鑒者或まるるを
 以て鑒定ハ實小一大事なりこふ又一説あり鑒定
 家而已小阿るべし萬る衆人より挙る時ハその言千
 里の遠き小達と然も其業の能と不能と他人
 知るべしその業小居る者ハ自然と知るとなり其
 實ハ

妄鑒なる其尊崇の人これを用ひて愚者ハあつく
 信じて瓦を玉と玉を真鑒といふ時小遇さば璞
 璧も瓦石と棄るる世小耳食と云ふ阿るて古人所謂
 耳或貴ぶの弊除きざり又精鑒小して真を贋と
 觀るあり漏鑒小して贋或真と觀る有り何と精
 鑒といふ處の或も一多る贋の真となりその精鑒
 小ありて贋と定まるありを阿るべし真物の妄鑒り
 遇して玉を瓦と愚人小捨るまじハ至寶の泥中
 埋没して黙さざり多る是ハ書画の或も小ありて世
 上の事小於ても皆然り近世小かりて上古も鑒

家小人物の偽有りこれ天地造化の贋作と云ふべき
 目力越人小誇りて世人小一隻眼あること或知らざる常
 小疴氣有りて我意小随て真を贋と贋を真と
 一系意小合はざる人ありて是小時ハ真蹟小批難を
 くもよる小いり或ハ束脩の用意小よることなど此類皆
 人物の偽ありて人道小何ぞ書画の偽物よりモ又
 甚一かりあるかくのごとく妄人ある由一ハ真蹟の亦小埋
 毛未贋作の至寶と云ふこと實小歎おはしきことなる
 ぞや予かくいふと病狂喪心小ハ何ぞ又按小文徵明
 先生の贋蹟を以真物なりと云はし一類ハ君子の心

術を見る小是まじり
衡山先生 鑒鑑識小精一うらまは 吳中の人其鑒鑑
 をおぼし小贋物を以真跡と云て詫をすること多し
 此邦を採幽永真をどの鑒鑑をばくる
 小實小大名をなむべき人の所為なり畠山牛菴古筆
 了佐まゝこれ小准む此輩ハ真を見て偽となし小
 量の人小ハあつざるなり

半鑒の論

己未鑒者なりと思ふ人小不塗重なる者多しと云
 治世小生まざる人兵学を好み攻城野戦の法を
 暗記して我を勝敗存亡の機を得と云と思へる
 類なり昔戦國の時趙の國小趙括といふものあり

若年より兵法を學びて天下あつれに小勝まさする者ありと
 思ふ阿る時趙王ちゆうわう是を用ひて大将と一秦の國と戦ひ
 一し小勝と戦得いくぞ軍大おほい破やぶまてりとぞ是兵家の
 之ふあらぶど萬よろ多し亦また志こころあり醫師いしが論ろんをよくし療治りょうぢ
 を能よくせざると相撲あひまう手紙てよく知りて勝かつことを得えざると
 同おな一書画しよゑを時代傳記じだいでんきを知り或あるハ花幅はなぢをあ收置あひまて
 鑑定かんてい真贋しんげんの所ところふしりてハ愚蒙ぐもうなる人阿り是性の
 志こころのしらしむる愛いとふして學まなびても至いたり難がたきらぬ此この心
 先生せんせいと崇あがめらるる時ハ鑑定かんていを乞こふ人あり極たぎて已やまが
 意いを以もつて門弟子もんていし小示こしすゆ果はくて誤あやまること多し一

人の收花しゆゑの真贋しんげんを辨わぐるはいと安やすきことなり已やまが收
 花はなせんと思おもふ時ハしらしむるを以もつて鑑かん定ていをあること
 あり又またある鑑かん定てい者ものありとかく印章いんせうのことを論ろんじて真跡しんせき
 ある紙しも贋げんなりといふことも絹統くわうの類るいふ押おしときハ
 裝潢しやうぢやうの仕方しやうはふより斜しや歪ゐふこともあり又また印色いんしきの
 善惡ぜんあく毛氈もうせんのこ薦せん席せきのこちをみて織せん洪かうのこ多しいは
 まは印いんのあきみて贋げんと定さだますべきふも何もからる鑑かん
 家ハ印章いんせうならばそのふしりてハ觀かんることを得えべらうぞ
 上古じやうこハ落款らくくわんなること少すく一骨董こつどう刀劍とうけんのごとく無名むなふ
 て賞しょう鑑かん定ていするはいらぶぞ也なり當世利たうせいりの為とあり亦またふく伏ふく

るの徒のそて阿そびとあるものすある故小無款おてハ
 通用遠くあり一こそ阿さば一く是故小古画今画共
 小無落款まのハ商家の手そ印を摸造一亦そ
 其のまも多一是等ハ印あく共真跡なるどと一
 席上の兵法畠水練の徒の鑒識大半
 右の類あり志共又難きと小えあど又易き小
 何ど樂まのハおのづくく會得ど一

予り友素原善一則を示と曰夢溪筆談を閱
 小書画を論じて云藏書畫者多取空名為鍾王
 顧陸之筆見者爭售此所謂耳鑒又有觀畫而以手

摸之相傳以為色不隱指者為佳畫此又在耳鑒
 之下謂之揣骨聽聲下ここ是當時書画を鑒定する
 者の状和漢回一なると見るど一揣骨聽聲ハ所
 謂書画の形容を以て鑒識する其の是なりこと
 より論を一世間多く耳鑒何つて眼鑒はくなく
 眼鑒何ま共亦神鑒なり一甚哉書画の一小多
 一と猶くくのどときと

學者鑒定を誤る事

書画家儒醫歌誹諸家者流各その先軍の遺墨哉
 觀て真偽を誤るあり是ハ無益の論なりと思ハる



牽演



雲之袖其為
 鏡面其其物
 臨心作詩
 叔翁官中者
 其心
 為境漁者培

先鑒家と好事家との別なること茲知るべし。知之者、
 不如好之者。好之者、不如樂之者。と之バ其道なるを
 能く知るべきふあはむ。初年晩年中年の速いあり
 或ハ結構の常ふ異なるあり又ハ席書或ハ臨書あるい見
 る所ふよめての揮毫或ハ蘭醉の筆跡千變万化な
 り。吾書と之ども十年前ふしてハ我書とを思ハまはぬ
 ことあり又他人ハ我書ふ倣うて書くるを見て、實ハ我
 書なりと名ふともあり。書画はたかまの山已まら量
 の外ハ觀ること茲得るべき。鑒定家は是を樂し
 こと道を道とて、之をを用る由一ふよくその変化は

知るふいふこと固よりあり。今時高名なる老儒先生何
 り其門下の書生常ふ古人の書を得て先生ふ跋金は
 乞ハ先生云予頗る書画を花貯はまはむ。他の真偽
 を辨むるふいふこと誰何某ハその道を得て能く真偽
 を識る彼ふ見せて定免しめて可なり。是その業の
 大ひなるを要する諸家の僻論を思ふ。ふその人の書は、ま
 文字あまはま真なるをを贋なりといひ其詩文の面々
 きふ會ハ贋なるをを真なりといふあり。由一ふ贋作
 ををたは者此意をさとりて又能く校謀をなす。贋
 文肆ふまはるふいふこと。

予聞るるありある学者生進つき脾胃よく
 して其るも食好を以るるが一時醫者のそと一
 て今日鮭を人よりあつりあるが食してゆくから
 せやと申あつりし小何くくるるべき功効よき
 物ふいと答へらまばやがて調味して夥しく食ふ
 惣身煩熱して四肢志きりふゆるこころむまの
 醫師通りこりし六家内の人こよび入きて毒魚と
 きし故是まては多ぶらまじりしがあまり美なる
 故贈りし人あまば薄味噌とそ煮させなごる先刻
 手紙にて尋しふくるわづむとの内返りも多

食い進多れば河の通りの苦しとありといし醫師こま
 成りて眉小皺成よせ鮭味味噌汁と八がてんもべと
 鍋を見ら小河豚汁なり是ハハ糸と驚くを亭主
 るし息のりよりそま鮭ハ河豚の一名俗誤て是
 をさけと流むさくハ正字鮭なり状鱒小似て圓
 肥其子有ニ胞胞中数十粒呼曰鮠最前尋小進
 せハ正字も鮭のりなり文字を志ぬ医者ハ阿
 やまもて思ひよるる死をいゑるなりといふめ
 いハ文字ハちちてしそが仕覚一の業と青砥
 の粉を水ふうきてのませらまば忽ち河豚の毒を解

して別条なりしとぞ文字知自慢小命をそとんと
 する者あり本草を覚（さ）共（そ）其の毒哉解（た）こと
 を知り多る者あり是書画のこと小阿（あ）さ（さ）茶話
 の一笑小傳（せ）一（し）鮭（さ）の河豚（た）あるとハ論衡（り）炮炙（し）論（り）杯
 小見（み）一（し）多ることあり志（し）共（そ）書論画論を知りありとも
 書画を見るときハ不識（し）の書画屋小元（え）及（ば）ざる（ん）一（し）
 或ハ博識（し）を自負（ふ）する人ありて多（く）書家小あ（し）
 てハ書論を難（え）ト画家小會（え）てハ畫論を問（ふ）人阿（あ）
 共俗（ふ）云半可（く）といふ者（も）て筆墨（び）を執（と）てハ豈（あ）尋常（じ）
 の書画家小元（え）及（ば）ざる（ん）魚（さ）也

書画好小異同あり事

世人の珍賞（しん）する物先儒流（り）をい（は）怪窩（かい）羅山（ら）丈山（じ）舜
 水藤樹仁齋（じ）祖来（そ）の諸先生（し）を初（は）とて人（ひ）奉（ふ）て寶（た）
 とそ志（し）共（そ）學風（がく）のとあるハその流派（り）よ（う）て違（ち）
 物学（ぶつ）を學（ま）ぶ者ハ閻（えん）密（みつ）學（がく）を呵（か）も閻（えん）密（みつ）學（がく）を（ま）る共
 ハ祖来（そ）を誹（ひ）る是（こ）世（せ）上（じやう）の常（じやう）あり志（し）共（そ）廣（くわ）く儒流（り）
 を好む人其差別（さ）なくその好品（こう）小會（え）ハ買取（か）て挿架（さ）
 とん（こ）ま（は）尊奉（そん）とハ（し）ど又好事（こう）の玩弄（わん）ある（ん）一（し）
 或ハ堀川（くわ）派（は）ば（し）りを好（む）あり物派（ぶつ）を（ま）るを（ま）るよ
 阿（あ）り是ハその門流（もん）を學（ま）ぶ者（も）の收（しゆ）花（か）を（ま）る所（しよ）あり其

他諸家者流皆かくのごとくその内儒流も、奇跡稀まじし
して茶家の玩弄あそびも遠く徇流まがらも清巖せいがん江月翠岩かうげすいがん
など人の尊ぶは皆茶人の用とする愛あり其餘そのあ蘄山せいざん
相置月舟あいきげづね山盤珪さんばんけい無難むなん桃水とうすい自隱じいん遂翁すいおう惠南師えなんしも
各高僧かくこうそうもして奇蹟きせきある人なれば茶家の珍賞ちんしょうすべき物
なれば其の時も遇あはさばば花はなをる者稀まじなり男おとこも
世間の奇まじも吠わる遺墨いぶくをて俗家ぞくかのものと免ま合あは
その奇迹きせきを穿鑿せんさくせんとて人の志こころもさる故ゆなり是こべて
茶家の玩弄あそびも遠く奇跡きせき遊戯ゆうぎもて人の善ぜん
を称たたへ徳とくを挙功きこう成歎じやうたんし奇まじを讚たたへ已ままも古人こじんも

劣せうるまじり人を善ぜんも進しんむ進しんとて心ありあきもの
そく実じつも真まことの好事こうじ者稀まじなり故ゆも世よもつるも
物の出ること遠く世人せじんの志こころもは品しんの中ちゆうも又またもこれ
あるものを好このむことハなかり故ゆも真まことの重寶じゆうぼうとて
るその少く世間通用せけんこうようの浅薄せんぱくのものと高價こうげんもなる
事こととハなまじり

蘄山紫山書榮悴の事 附茶論

禪家ぜんかの高僧こうそう蘄山せいざん紫野むらさきのの二派にはい今時いまとき榮悴えいすいの勝劣しょうりやくをへ
先ま黄蘗わうはく八隱はついん元木げんぼく菴あん即非じくひ南源なんげん高泉こうせん悦山えつざん成始じやうしして
墨池ぼくち家かも八獨はつどく玄曼げんまん公大こうだい鵬ほう喝浪かくらう道本だうほんも各千里かくせんりの

波濤を越 本朝小帰化して道德高きものなるむ文
 墨心小兼具より一此諸賢の本邦小来る小あむむ
 只手跡のこ船来をいりむりの好品とすきや大徳寺派
 みていも一休澤庵ハ性豁達して凡小超るりその余
 春屋玉室玉舟春澤江月清巖翠岩江雲江雪天祐の
 輩得道の浅深いふなるや去るむ床頭小掛魚き能書
 を見む志多逢共利休宗旦古田金森小遠公なるの
 茶人皆此紫山小参禪キ一故おのづく茶道小も達
 せしむ一と見ぬ故小世の茶家専ら是哉貴んで今
 茶より小與るる人えきそして賞むる様小なりんが

書跡小亦稀なり予書画を嚮を業として藤紫二山
 の書跡の遇不遇を見る小玉ハ埋もきて尾の貴むる小
 似りりかくいしそ予嘗て茶をを知らむしそりり
 何れも里小常今の茶ハ古道小よる茶小何れも別小
 一種世事應接の茶とありあるやうなり器物ハ寶く
 らとあり書画ハ事實傳記を去るむしそり只人の耳近き
 を尊む或ハ詩文の長くして解をざるハ客小失禮なり
 として俗用の書画を用るなむとさる小雅事を尚ぶ習氣
 なく一種の後世茶の湯ハ多しと見えり茶事の原因
 始を尋ねバ俗意めてハ出来るしとあむる

茶ハ元來道を學ぶ者書を讀座禪ざぜんもも小睡せうすい魔まの侵しんををささらんらんがが為ため小喫せうしつせせをを知識ちしきののううららふふよりよりて茶ちやハハよくよく禪ぜん意いふふかかををひひううららととてて專せんらら禪ぜん機きふふよりより式法しきほうをを定じやう免めん即悟道じくごどうの一助いちしよととせせららなりなり然しかるるふふららんん玩くわん弄りやうととなりなりてて東山とうざん殿でんのの比益ひやく盛せいふふなりなりてて專せんらら玩くわん古このの為ためののこころろ既すで小驕奢せうせうのの意いをを生せいじじ是ぜがが為ため小天せうてん下げのの古器こき古董書画こぶつしやうゑををここととぐぐくく集しゆめめるるふふららんん是ぜぞぞ足利家あしきや衰微さいゑのの基もとととなりなりてて心こころ得とくあるるべきべきことことなりなりそのその後のち天正てんせい慶長けいぢやうのの比ひ太閤たいがう殿でん下げのの機謀きぼう小せうよりよりてて軍事ぐんじのの用もちととなりなりてて其その極きやく小せうなりなりててハハ利休りきゆをを

罪つみききるるそのその思慮しりよいいふふややありりんん今いま太平たいへい鼓腹こふく乃なほ由よし代よふふありりててハハ主客しゆきやく尊恭そんきやうのの禮儀らいぎととなりなりててそのその時とき小せう者しやととなりなりてて其その用もちををななすすことこと禪ぜん意いもも背そむののむむとと云いふふ一ひとささとと共とも玩古くわんこのの用もち多おほくく時ときハハ浮う貴き夥おほくくししてて驕奢せうせうのの害がいをを生せいじじ軍事ぐんじのの用もちととなりなりてて時ときハハ疑惑ぎわくのの害がいをを生せいじじ生せいじじ尊そん恭きやうのの礼らい多おほくく時ときハハ佞媚ねいびのの害がいをを生せいじじ又また貪おん欲よくのの害がい各おの々おのとと通とほじじててままぬぬれれざるるなりなりててままじじこれこれをを禪家ぜんか小せう用もちままババ大だい小悟道せうごどうのの助すけととなりなりとと云いふふ無我むがみみてて用もちるる故ゆゑなりなり京師きやうしの人ひとハハ能よくく儉約けんやくののこころろ也なり是こゝをを用もちるとといいふふ是こゝハハ土地とちのの風かぜみみてて無益むえきのの酒食しゆじき小せう

代えて、もちゆゑなるべし。又、是、禅意の去りしむるころ、
 ふしと、全く害の、ふえ何、江月清巖の書幅何の、
 ふ掛ると云を、あ、むし、今世の茶人、は、かく、珠光利休の
 輩を、あ、り、し、む、こと、多、く、よ、く、茶意の古道、
 日さ、ま、の、掛幅、も、も、茶人の書画の外、ふ、あ、る、べ、し、
 千年丹頂鶴、萬歳緑毛龜、あ、の、語を、書、く、は、禅意、
 面白、く、さ、ま、の、茶席、ふ、用、を、一、画、も、又、是、ふ、同、一、又、儒者の
 書、あ、り、共、宋、儒の、径、路、或、は、李、杜の、詩、句、な、ど、書、く、は、
 ま、も、禅、意、ふ、合、て、あ、る、ろ、く、掛、て、用、あ、り、當、今、は、其、用、
 處、き、紙、捨、て、捨、て、き、を、用、ゆ、是、は、故、事、よ、り、茶、を、崩、し、

茶より故事乃意を崩し、茶の茶多ることを去る、故
 事の故より、こと、紙、知、む、その、巧、拙、を、論、ぜ、し、
 世、ふ、少、き、その、紙、求、む、は、笑、ふ、處、き、の、甚、し、き、こ、と、
 也、や、予、あ、る、時、清、巖、和、尚、法、問、の、語、を、書、き、
 壁、間、ふ、掛、多、る、ふ、あ、る、茶、人、来、り、て、五、字、
 て、ほ、し、き、な、り、と、り、又、あ、る、時、徂、来、翁、の、五、言、
 を、儒、者、是、を、見、て、云、く、る、は、惜、む、べ、し、
 く、一、賞、心、薄、し、詩、ふ、て、を、あ、ま、い、
 ふ、て、ほ、し、き、な、り、と、是、の、望、ふ、表、裏、
 其、意、何、な、り、也、去、る、べ、し、予、今、先、輩、
 聞、く、あ、る、ふ、因、に

茶より小三害有るを論じて珠光利休の本意を復し茶道の淳素を失はざらん事誠禪のよき

妙語時小不遇事

予阿る時翠巖和尚の書きし涅槃妙心の一行物を茶人に見せたる小涅槃とハ死せることありとて忌み嫌はる甚し按小涅槃妙心正法眼藏の語ハ禪家第一の心法にして法華の妙法天台の中道實相浄土の弥陀佛真言の阿字本不生等のごとく此道ハ肝要の語あるを茶人の嫌はぬ何なる心よ也千年丹頂鶴萬歳緑毛龜をどの浅俗小近きと日をもよゝして語るべしぞ福壽海無量ハ俗情小喜小一き

語をよき共讀經小耳をよきある故に誰をきらふもわりの予又阿る家を訪ひし小人刀活人劍と書あるを五字一行なりとてよくま古筆家の極をとり裝潢小錦繡を用ひて是紙茶席小掛より主人云武士ハ人を活むる為小帶刀はるとハよき悟りありとて喜び不ろし是ぞ禪家小所謂無心なる者もと思ふべきをうかりき此語を書ある禪僧殺の字を落すべき様ありしをよきと云ふハ今世の茶人のよきをよきて姦商をが裁きりて巧小裝潢せしものにて殺人刀活人劍の妙語を損壞しある大ひある罪なるべし又予老友池田松石澤菴が書きし應無所住而生其心の一行

を茶人の手より得て大に喜びて云々ハ茶人此意を知ず
 して買うるが無所住の語ハ苦心せし故予祇んごらふさと
 せどもきくは遂に予が又購ふ事ハありぬと今其語を按る
 小自己心小くもある所なきを無心と云ふハ天地回一不
 て是即悟道の義なり闇の夜ハありぬ鳥のとききりば
 生息ぬさたの父ぞ戀しきの歌をど同一ころりて面白
 き妙語あるを俗人住家るしとて覺えを嫌ふち
 笑ふゆきの甚しきありぬ

圖樣雅俗好の事

今世畫幅を好者を俗字の一行書を好ふひとくして

出来能く共列仙君子道釋などの像ある圖樣をバ
 して賞玩すること遠く是ハおのこは向ふ恐怖の
 心生ずる由一ふきふ柳蓮鷺鳥の類ハ陰氣の樹
 鳥として嫌ひ屈原巢父許由夷齊蘇武昭君などをバ流
 さる人或ハ終を全くせざる人ありとてきくハ蟬丸を指
 者ありとて忌む鴨長明瀧の音を聞かぬ是ハひとく
 ありふりてまじり此人ハ皆後世の規本ある先賢として
 尤尊崇すべき故去るを利休古田金森小堀侯乃類
 つまの終を全くせざれ共を迷ふハ昏迷してころりつ
 ぎハ何や一まじりあり聖賢道釋或ハ龍席或ハ牛馬杯

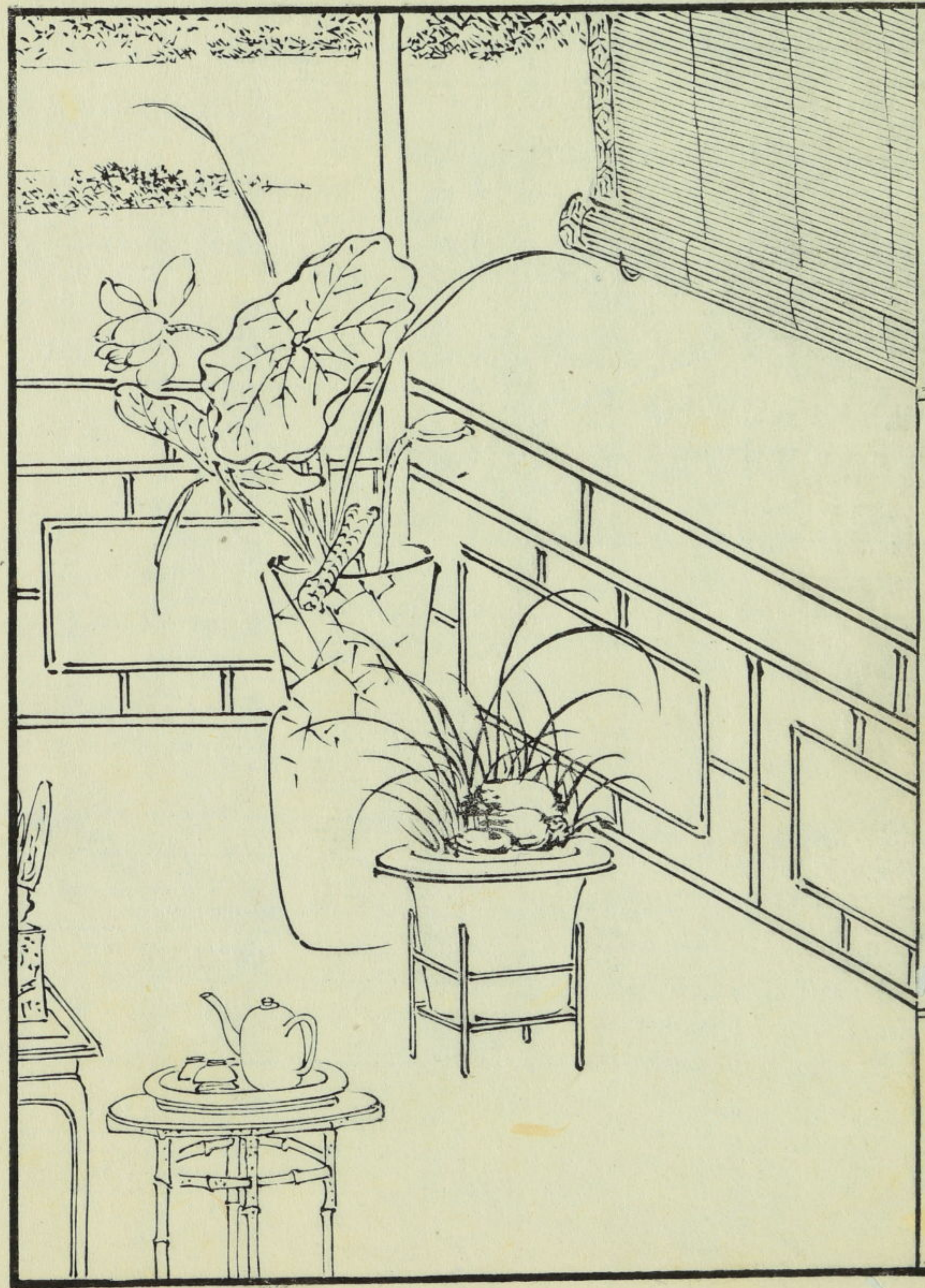
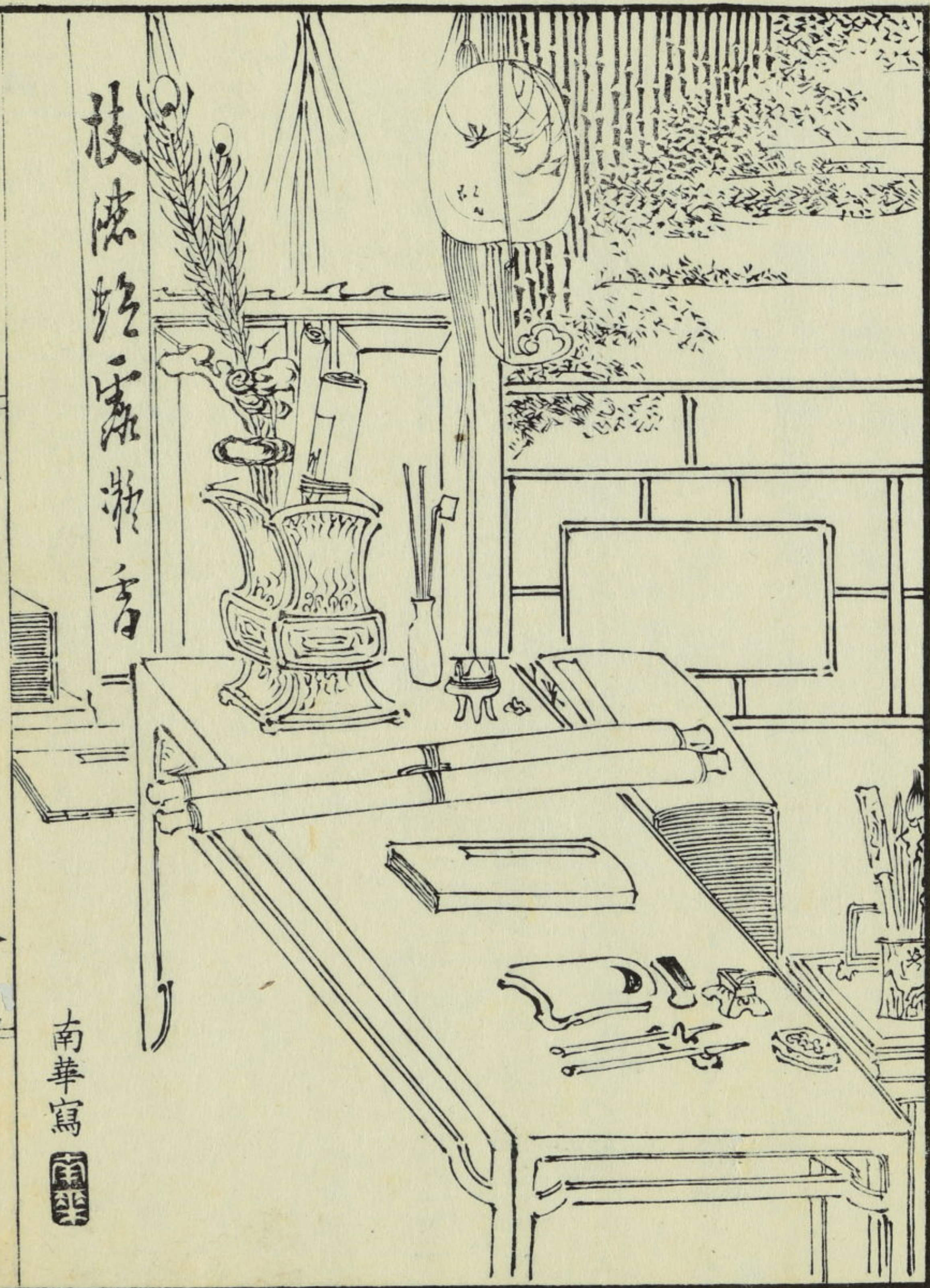
各格法ありて精神を窮めざるは畫くことありて故に尤
肝要とせざる要なきは志なき紙一筆の席書一興に樂しむる
戲墨紙を面白しとせざる時ハ孰も此道紙學びて筆力精
神をつくむるものありて 百年以前の画三幅對の中ハ道
釋の圖を画し紙當今の意まで見ば寺院の掛幅のやま
思ひもて理りぞり 先書画好事の法ハ或時ハ聖賢乃
像を掛て聖賢多しんこと紙欲し或ハ神仏道釋義勇の
像を各その域小しんことを欲し或ハ筆力精神の妙紙
見てハ己まが業の不足を歎じ或ハ山水花卉の優美紙て
暢然として養心の術を思ひ或ハ同好の朋を請し茶紙

點して雅談小供をるなど其真意をば圖樣百品萬
物數を以て樂事とせざるは子あり因ふ云當今の書畫
紙好者そのとる所おのく義あり左小其大畧紙あぐり

- 一 画を學びて業の巧なるを好者
- 一 鑑定紙好て精神風韻を賞する者
- 一 好事小して圖樣の異なる紙この分者
- 一 業の巧拙を不論人物紙愛する者
- 一 畫者小不拘飄逸の作を好者
- 一 華美小して着色没骨を好者
- 一 灑落小して澹泊なるを好者

枝德始露漸芳

南華寫



右好所の者ハつゞき小実素なり予がごときハつゞき此を
このむ小つゞき嗚呼是書画を樂者なりや書画小苦心
あるそのちりや

蓮ハ君子の徳小比を泥よりいでるまじ小染む香氣
高く花葉何ぞやのなり故小宋の大賢周濂溪こそ
此免で愛する後世を志尚高潔なる者皆この
花を賞觀するハなり一竺土小ハりて此花を尊崇
する故小我朝やも佛像のうつろ小ハ瓶小をもて是
成つる祢又ハ寺院の池をど小必こそを栽るなり俗意
小ハ此花の佛邊小有成をて死をいつ小心より忌と見ゆ

婦女小兒の見ふして男子もその心を清く徳を修る
氣象なきハ憐むるなり因小云豫樂院殿雪舟が画
る維摩の大幅長二尺八寸横二尺五六寸ハ何ぶべき城あ度
河園の床小掛のゆひをかる大幅を何とて掛らる
ふやと伺小夜會の茶小出掛遊なることあり又四季
各極ハ文を或ハ月日など何ハ時節相應小ハ一畫
園夏ハ冬の各各ハ夏の園城かくることありと何らさる
とあり又春の茶の湯會小日寛の葡萄の画成掛ゆひ
ことあり賛小春雨の字ある城あてなりとぞ 槐記
が小名公の所為あやろき事あり

和歌連作意好嫌の事

今世和歌連誹を懐紙或ハ短冊とて賞玩する小先哀
 傷歌或ハ戀歌或ハ述懐或ハ送別の類紙嫌ハ又俳諧發
 句を詞のらふ忌多きこと何れも意ある紙嫌ハ
 こそあやむべきの甚きなり四時循環して暑往て寒
 来り無心の花を盛なるふ何れも人紙嫌を衰するふ
 つりてハ人きりて来どあるハさるの吹みて雨ふあぢこ
 風ふちさるあはれさ紙思ハ暑の堪う蚊のうるささ
 負き人のやりくふ濃ぐと紙思ハ秋の何れハあづ
 虫ハ感一ゆを落葉して鹿を時つゆゆくは海

つばきをあれあはれなるハ和歌誹諧の真情といふを即
 ちのこぞ一貫之朝臣の述ゆハ愁傷愛慕戀その
 所ふつとさば鬼神紙をうごう猛きはるふて哀まを
 つふこと紙あはれなる武士の心紙をうごうこと何れも
 定家卿小倉色紙のうらえ七分當今の懐紙短冊好乃
 意ハ合紙の志共歌学者誹諧者流のハわら
 陋習ハ云はざることして皆替ふ吠る徒尋常の茶人の風ハ
 化を造作さし世多小媚多きこと紙好ミ紙中の換壞
 多るをバ廢する小多るなり実ハなごりしきことなるや
 後ハ真跡世ふをうて贋作のこの通用とあらんと思はる

先多とていとも其角が白小

せめてその貧乏柿小梅乃花

と况味ある句なき共俗士ごうしの貧乏びんぼうといふ字あざなは

志くまじきや哉翁が深川八貧の中とて

米買小雪の代衣しろぎやなけり改中

といふ是れ貧乏の白小なり多き共詞の上小なり

さればいとき婦むすめとなく人皆是哉あやうより二り更さら登あがが

腰ぬらのき小かきひる鳴子丸

といふ腰ぬけの五文字ごもじは忌嫌いけん小なり是も真小好まごころと

誰人たれひとの况味きやうみを志りて賞あやむせまども俗士ごうしの好ごころ小合あはされ

ハ販買はんばいの通用つうようハ遠とほ一其真小好まごころと多おほ好ごころ多おほ家いへのいさご世小

出でざるこそうとなき凡たゞそ人ひとの尊そん歎たん富貴ふき小處ところしてハ世情せじやう

ふうとく哀あはまといふことことをさとり志こころること難むづかき故ゆゑ小書かき哉

よと道みちは学まなびて人情にんじやうの向背かうはい女事によじの變態へんたい哉あやうと

いさあつと志こころくまじバ詞ことば野鄙やび小ちひて逸ゆるなるもの何なにと

よと感かんずること皆道みち小入いるのははなり讚さん称しょう慶賀けいがの詞

ハ大抵おほむね皆富貴ふき小ちひて野逸やいつ小ちひと感かんずる所ところなり

昔むかし齊景公せいけいこう大國たいこく小王こおう多おほる日ひの長久ながひなりんこと哉あやう欲ほし死しと

哉あやうなりと多おほまる小側こたわら小阿あり史し孔こう梁丘りやうしゆ據よ諂たん諛ゆて共小

泣なみきハ晏平仲えんぺいじゆうハ獨ひとり笑わらて死し生なま去来そくらいの道理だいり哉あやうなり

景公大小慙多ひとなり人壽大九七旬と定まざるを
 先五六十ひして是るものなるは亀鶴の千萬ひ羨まと善
 その三分一を同ドひんひ世の中大小ひといふもの
 人よその情理いを知り安然いして生涯いをあくりなばその
 場ひ乃ひんでハ帰路いのころして別ひ驚いくべきものを
 思いふ予いまごころ所いふことさばいづる也い覺束いなり
 萬物命数いありそのうち人ハ智いある故い四情深いよく
 智い越いて情い越い制いをべし古人い龜鶴い越いよりいハ長壽
 越い尊いよまは共い鶴いハ食い越い少いくして身い越い保いち龜いハ氣
 を吸いつて食いを飼いざるもありと云ふとハ人の寡欲いや

て心越い浩然い養いふこと一人いをまる龜鶴いのぬく後
 五十ひして命い越い終いハ命い越い前定いの数いありと清い心い省い靈
 て諸欲い越い制い寡いく七い百壽いを保いむを至いる命い越いあり
 近世い一茶子い辭い世いの白いとてア、まよ生いても龜いの百い分い
 とハありいるささりなりいり

墓碣碑帖の事

書越い學いぶ者先楷書いハ虞世南い廟堂碑い顔真卿い多寶塔
 碑い家廟碑い歐陽詢い皇甫府君碑い九成宮銘い柳公權い玄秘塔
 碑い等の類いを以いて善いとモ行草いハ二王帖い越い始いして玉煙堂
 停雲館い戲鴻堂いより以下諸法帖いのぞふるいといふいる

書ハ漢碑数百種夏承體ハ一種のその小ハ曹全碑紙
以て一ト也唐碑ハ梁昇卿御史臺銘史維則大智禪師
碑を善トシ行書ハ李北海雲麾將軍尤佳品トシ書法學
ぶ者ハ碑刻紙以て一ト法帖佳品ある紙二トハ廣澤
翁の以より安永天明間までハ碑本至て稀ナリハ文政
中新渡船來して今ハ何れも採く志ること紙得たり又和帖
墨本正面摺ハ近世予友杉本望雲あるその清法ハ倣ハ
得て尤髣髴たり實ハ文墨のひくく時至まると云
志るハ古碑墓碣銘ハ寺院の塔牌ハ等一きそのなる紙

書法學ぬ君子是哉机上ハ排置して和漢同一ハ珍玩也
俗士の福祿壽或ハ千羊丹頂鶴など紙まてたを眼より見
ハその身紙晋唐宋元の墓所ハ置ハ似多りと云ハ萬卷書
開見古人トシ見識を俗意ハよる時ハ生前の人亡人紙友ト
するの心トシハ嗚呼雅俗の意懸隔ハくのぬ

真蹟の劣墨刻ハ勝る事

真跡ハ至て稀ナリ又碑帖の及ぶ厚き書ハ何れも謝在杭
云大抵真蹟雖劣猶勝墨刻之佳者ト何り上古ハ姑置
元朝以來趙子昂の書画尤質作ハ多ク明ハりてハ
唐寅吳寬ハ姑置文徵明董其昌の大家質本幾百種ト

つこと諸書小いごと世人の知る要なり故小文人雅士真蹟
の此土小あるべきやうなりとせむハ理りなり然も共又小
説ありると贋なりといふ古其時代小して門弟子或も
能仿ふ者の傳寫なり又墨刻の佳なる小勝るものあり
是ハ手本とせむふ多る物なきべ價小よりて收花せざる
なり又墨帖といふも贋本多きことハ此道の諸先生小問ひ
尋て知るべし

米庵先生之説より

書畫臨寫可謹事

附裝潢字義

廣澤先生云米元章其花多る王羲之の真跡来禽帖
の事或る曾經人用薄紙搨書墨即透数行仍汗静

地深可歎息云云又云影書ハ尤大切小て黄硬紙を作
りて遊絲筆紙を明窓小向ひて手のき多る細心の人
寫さむと書画ハ尤く何るべきものなり又云書畫紙
表具なる紙裝潢装池とも云ハ四方小縁あるの稱なり池
淡もいけなり池ハ四方小堤あるなりと巻軸ハ掛物紙
横小見多る物なきハ今の巻軸ハ甚略小して書画紙愛
護する心小ハかならんと云

於菟按小裝潢の潢紙淡池の義なりと心得て装池共
いハ誤りなるべし裝潢の潢ハ平声元來唐の六典小裝潢匠
といふ者何りて即ち今の官府の表具師なり潢の字

釋名小潢ハ染紙也といひ廣韻小潢ハ染書也といひ
 表具の時黄蘗の汁紙をて紙の色紙付ることなり是ハ
 蠹虫をよの生ぜぬ為なりとぞ故小六典の註小を裝成
 而以蠟潢紙也と見内後の人新奇の説考一出して
 四方小邊ある故なりと云ハ牽強小近一此より外
 集真珠船なりと小委一久辨一多邊バ併を考ふ處一

近世名家書畫談二編卷之一畢

